

「次世代の活動」「若ものを交えた交流」について

被爆者の平均年齢が82歳をこえ、直接被爆体験を聞くことが難しくなっている現状の中、いかにして次の世代に「被爆の実相」「核のない世界をという被爆者の想い」等を伝えていくかが、大きな課題となっています。そのため、今回の原爆展では『かたりつぐ〜若ものたちへ〜』をテーマに「次世代の活動」として、高校生平和大使・高校生一万人署名・被爆者と描く被爆体験画・被爆体験交流証言者等の展示を行い、「若ものを交えた交流」を企画しました。

交流会については若ものが参加してくれるのかとの不安もありましたが、暁光高校の平和ゼミナールの生徒さんが顧問の和井田先生（先生も若い世代）と参加、堺西高校の山内先生が卒業生の大学生と参加、新聞記事を見た近畿大学の学生さん・大阪市の小学校教員が参加など、有意義な交流となりました。



【暁光高校の生徒さんの感想】

堺原爆展に行って、中学校・高校の教科書に載っていないような資料・絵・写真を見られたり、実際に原爆の被害を受けた物を見学出来たりしてよかったです。

私が一番印象に残っているのは、原爆被害を絵で伝えていたコーナーです。昔は、写真の技術もまだ発達していなかったの、白黒の写真が多く、今まではあまり印象に残りませんでした。今回も写真は見づらいな、と思ったり、文章に集中していたりで、印象に強くは残りませんでした。

そして絵を見たときにうわっと声が出てしまうほどのものでした。一枚一枚色の使い方、塗り方、表現の方法が違い、すごく目に残るものでした。その中で特に印象に残っているのは、『罪なき人への惨劇』という絵です。その絵は被爆した人の絵が描かれていて、ずるむけの皮やケガなどがリアルに描かれていました。

作者のコメントでは、「一緒に逃げようと手を引いたら、手の甲から指にかけて皮がつるつとむけた」と書かれており、それを読んで、すごく泣きそうになりました。その人はその後どうなったのだろう。身体全身に大やけどを負って、眼もどこにあるかわからないほどはれていて……。そんなことをみながら思っていました。

長崎からの証言のコーナーでは、山脇佳朗さんの被爆体験を語り部の方が気持ちを込めて代弁していて、本人ではないけど、山脇さんがどんなものを見たのか等を知れて、良かったです。お話を聞いていて、感覚がマヒして、死体が障害物にしか見えなかったと聞いて、私もその場にいたらそうなってしまうのかなと思ったら、ぞっとしました。また、自分の父が半焼けの状態だった。そして頭蓋骨だけでも持って帰ろうとしたら、半焼けの脳が落ちてきたと聞いて、聞いていただけなのに私も気分が悪くなってしまいました。

今回の堺原爆展に参加してみて、本当に原爆が危険なものだと改めて確認できました。数多くの貴重な資料を見られて、本当に良い体験になりました。

